

博士論文（要約）

論文題目 アメリカ及び日本現代小説における非ロマン主義的
『ドン・キホーテ』受容に関する比較考察

氏名 田中有美

ミゲル・デ・セルバンテス（1547～1616年）の『ドン・キホーテ』（前篇1605年、後篇1615年）は、世界文学における「最初の大小説」（ジェルジ・ルカーチ）とも呼ばれ、文学史上ではヨーロッパ近代小説の祖として揺るぎない地位にある。批評や文学論、文学史に限らず、創作の現場においても多くの作家たちの関心を惹きつけている。このような影響力ゆえに、『ドン・キホーテ』研究のなかにその受容研究がサブ・ジャンルとして成立している。しかし、そういった研究の多くは、『ドン・キホーテ』の解釈史を考慮しておらず、個々の受容例が並置されるに留まっている。たしかに、様々な受容例から、受容の多様性が強く認識されるが、個々の受容例を総合して、時代や地域ごと、または、ジャンルごとに特徴を抽出するというような試みは少ない。

断片的研究が並んでいるだけの受容研究とは一線を画し、ヨーロッパ諸国における『ドン・キホーテ』批評の「ロマン主義的解釈」の勃興と発展を指摘したのは、アンソニー・クロースの『「ドン・キホーテ」のロマン主義的解釈』（1978年）である。クロースは、十九世紀に活躍したドイツのロマン主義者たちの『ドン・キホーテ』評価をきっかけに、『ドン・キホーテ』の解釈が喜劇から悲劇へと180度変わってしまったことを実証的な手法で示している。つまり、十九世紀以降、ヨーロッパでは、ドン・キホーテが徐々に哄笑の対象から、挫折を運命づけられた悲しき有徳の士へと変貌したのである。本論文は、クロースのヨーロッパにおける受容への考察を踏まえ、『ドン・キホーテ』解釈のロマン主義化という傾向が、ヨーロッパ以外の地域や、クロースが扱った批評以外の領域にも見られるのかどうかを検証するものである。

そこで、ヨーロッパ以外の地域ということに関しては、ヨーロッパに近い外部としてアメリカ、そして、さらに文化的距離を隔てた外部として日本に焦点を当て、「領域」に関しては、クロースが批評にのみ焦点を当てていることから、本論文は考察の対象を「現代の小説」に選定した。「現代」としたのは、クロースが、現代もロマン主義的な『ドン・キホーテ』解釈が優勢であると主張していることを受け、創作の場についてもその傾向があてはまるかどうかを検証するためである。また、「小説」のみを扱うことにしたのは、批評で指摘されているような傾向が、ヨーロッパ以外の「文学作品」における受容にもみられるのかどうかを考察するためと、『ドン・キホーテ』が起源ともされる「小説」というジャ

ジャンルにおいて、その起源がどのように表象されているかということは『ドン・キホーテ』受容というテーマを超えて興味深い問題と考えるからである。現代における「小説」の書き手たちが、この『ドン・キホーテ』という「起源」と、どのように向き合っているのかを考える意味でも、小説というジャンルに特に注目する価値はある。

アメリカ文学と『ドン・キホーテ』の関係に関しては、たとえば、モンセラ・ヒネスによって、南部文学の枠組みのなかでキホーティズムの系譜がすでに指摘されている。ヒネスは、ウィリアム・フォークナー（1897～1962年）、ジェイムズ・ブランチ・キャベル（1879～1958年）、ユードラ・ウェルティ（1909～2001年）、ウォーカー・パーシー（1916～1990年）といった南部作家たちが、一種の懐古主義としてのキホーティズムを南部の文脈で発展させたことを示す。しかし、ヒネス自身が前提とする『ドン・キホーテ』解釈が、典型的なロマン主義的解釈に属するものである点は留意すべきである。南部作家の創作において、『ドン・キホーテ』が大きな影響をもっている点を指摘したことの意義は大きいですが、ヒネスが自らのロマン主義的解釈に意識的でない点は問題である。ヒネスが描出する「南部」におけるキホーティズムも、過度にロマン主義的に記述されている可能性も疑われる。この問題点を発展的に解消することが、本論文第一部の目的の一つでもある。

本論文の第一部は、クロースが提示した『ドン・キホーテ』批評における潮流を考慮しつつ、ヒネスの描く南部キホーティズムを再検証する場となっている。過去の栄光や名誉のために戦う英雄としてのドン・キホーテを創造の糧としてきたとされる南部出身の作家たちのなかから、フォークナー、パーシー、ジョン・ケネディ・トゥール（1937～1969年）の作品に焦点を当てる。この三人の南部出身の作家を『ドン・キホーテ』でつなぐ視点は、パーシーの『ドン・キホーテ』観に誘発されたものである。まず、パーシーは、典型的なロマン主義的受容といえるデイル・ワッサーマンの『ラ・マンチャの男』に違和感を表明している。そして、自らの作品の主人公たちを、フォークナーがつくり出したキホーテ的キャラクターの一人、自殺をしなかったクエンティン・コンプソンと位置づけている。そして、パーシーは、トゥールの作品が日の目を見た際の最大の功労者であり、かつ、トゥールの『愚か者連合』（1961年執筆、1980年に死

後出版、ピューリツァー賞受賞)の主人公イグネシマス・ライリーをドン・キホーテと呼び、高く評価した。英雄などとはほど遠い喜劇的なキャラクターであるイグネシマスにドン・キホーテ性を見いだしているのである。このような『ドン・キホーテ』への言及は、南部文学にもロマン主義的な見方では説明できない『ドン・キホーテ』受容が存在することを暗示している。

その非ロマン主義的な受容の存在を検証するため、第一部第一章ではフォークナー作品にドン・キホーテ的人物の系譜を措定し、一見、ロマン主義的にみえるフォークナーの『ドン・キホーテ』受容が、実は、安易な理想主義、懐古主義に対する批判性を備えていることを示す。第一部第二章では、生き続けるドン・キホーテ、生き続けるクエンティン・コンプソンとして造形された、パーシーの『映画狂』(1961年、全米図書賞受賞)の主人公ビックス・ボーリングを考察する。女性を惹きつける容姿の持ち主で、経済的にも恵まれたビックスは、一見、ドン・キホーテと接点がないように思われるが、彼が試みる「探求」と呼ばれる行為、ビックスにとっての映画という存在、ビックス家の伝統、女性の不在という四つの切り口から、ビックスに潜むキホーティズムを明らかにする。そして、第一部第三章では、そのパーシーが「ドン・キホーテ」と呼んだトゥールの『愚か者連合』の主人公イグネシマスとを考察する。この作品に関しては、トゥールの死後、十年以上経ってからの出版という特別な出版経緯もあり、トゥールが『ドン・キホーテ』にどれくらい精通していたかを実証的に示すことは難しい。しかし、出版に尽力したパーシーが本作品のために書き下ろした序文でイグネシマスをドン・キホーテに譬えたことから、イグネシマスとドン・キホーテを結びつけることは十分に浸透した見方となっている。体の大きい大食漢で、三十歳を超えても働きもせず、母親と同居し、時折映画を観に行く以外は引きこもり気味の中世至上主義者イグネシマスにドン・キホーテ性を見出し、それを容認する感性は、明らかにロマン主義的解釈とは異質なものである。現代アメリカ版ドン・キホーテとしてのイグネシマスの分析を通して、すでに『ドン・キホーテ』においても弱体化していたというグロテスク・リアリズムの笑いの力(ルカーチ)が再生され、増幅してさえいることを示した。つまり、『愚か者連合』は、ヒネスが示した南部におけるロマン主義的キホーティズムでは決して説明できないのである。

続いて、第二部では、現代日本文学における『ドン・キホーテ』受容を考察する。既に述べたように、本論の考察の対象は文学作品であるが、日本文学においては、『ドン・キホーテ』についての評論と、『ドン・キホーテ』を踏まえて創作された文学作品のあいだに興味深い乖離が見られる。『ドン・キホーテ』の評論は、坪内逍遙の「『ウイット』と『ヒューモル』との区別」（1888年）にはじまり、内村鑑三の「西班牙の文士セルベンテス」（1898年）、上田敏の「滑稽趣味」（1906年）、花田清輝の『ドン・キホーテ』に関する一連のエッセイ（1930年代から60年代にかけて）、中村光夫の「ドン・キホーテ」（1944年）、磯田光一の「『ドン・キホーテ』論」（1969年）などによって形成された。日本で『ドン・キホーテ』論が発表され始めた頃、前掲の坪内や内村、そして、上田などが、一様に十返舎一九の『東海道中膝栗毛』（1802～1814年）と比較している。『ドン・キホーテ』から、滑稽本である『東海道中膝栗毛』が想起されたということは、『ドン・キホーテ』の滑稽さが理解されていたと思われるが、それと同時に、その滑稽さのなかに悲哀を察知する解釈がなされている。つまり、受容の初期段階から、滑稽さを高く評価しつつも、そこにある種の「品」（坪内）／品位（上田）や「道德」（内村）、「悲壯の感」（上田）を見出すという、ロマン主義的解釈の系列に入る解釈が優勢だったのである。しかし、花田だけは異色である。『ドイツ・イデオロギー』や『資本論』におけるマルクスの『ドン・キホーテ』の使用などにも言及しつつ、花田は、ドン・キホーテに全体主義者や保守化した左翼の姿を見出す一方、理想と現実のバランスがとれた者としてサンチョを好意的に評価している。このように、ドン・キホーテとサンチョの差異を強調する点でも、花田は独特である。

花田を除き、ロマン主義的解釈ということで説明できる評論が多いのに対し、文学作品における『ドン・キホーテ』については、多くの場合、ドン・キホーテを理想化するという傾向とは異なる様相を呈している。そもそも、日本文学の作品において、『ドン・キホーテ』の存在を徹底的に意識して書かれたものの数は少ない。これは、スペイン文学である『ドン・キホーテ』が、イギリス文学やフランス文学の作品ほどには日本文学に影響を及ぼさなかったことの証左といえる。しかし、1990年から十年ほどのあいだに、三作、『ドン・キホーテ』と密接な関係をもつ作品が発表された。それは、矢作俊彦の『スズキさんの休息と

遍歴：かくも誇らかなるドーシーボーの騎行』（1990年）と、高橋源一郎の『ゴースト・バスターズ』（1997年）、そして、大江健三郎の『憂い顔の童子』（2002年）である。これらの作品は、ロマン主義的解釈とは明らかに一線を画すものである。第二部ではこの三作品を分析している。

第二部第一章で扱う『スズキさん』においては、主人公のスズキさんがドン・キホーテとなりながら、全共闘時代のマドンナとの再会を求めて東京から北海道まで旅をするのであるが、ここで登場する『ドン・キホーテ』の全共闘時代の意味をたどることによって、マルクス主義的文脈ではドン・キホーテが否定的比喩として機能していたことに注目する。第二部第二章では、『ゴースト・バスターズ』を論じ、小説の祖としての『ドン・キホーテ』の文学的意味を十全に活用した作品として位置づける。第二部第三章では、『憂い顔の童子』を扱う。『憂い顔の童子』と『ドン・キホーテ』の関係の主要な特徴は、ロマン主義解釈の文脈では忘れ去られた、身体性、グロテスク性、暴力性に基づいている。このことは、道中、ドン・キホーテが受け続ける身体的ダメージと、主人公長江古義人が遭遇する災難が度々重ね合わされていることから明らかである。大江の『ドン・キホーテ』の使い方は、バフチンのグロテスク・リアリズムの文脈における『ドン・キホーテ』を活用したものである可能性を指摘する。また、大江のあたらしいドン・キホーテへの意味づけとして、「古い」の問題が付け加えられている点についても検討する。

以上の考察から、現代日米文学の創作の場における『ドン・キホーテ』はかならずしもロマン主義的解釈の傾向を示してはいないということが明らかになるだろう。そして、扱ったアメリカ南部の三作品では、個人の探求のモチーフとしてドン・キホーテのみが使われていたのに対し、日本文学からの三作品では、どれも、ドン・キホーテとサンチョにあたる二人組のモチーフが重要視された点も特筆に値する。

また、本論文は比較文学、とりわけ、受容・影響研究という分野の方法論的な問題も念頭に置いている。冒頭でも述べたように、ルカーチは『ドン・キホーテ』を「世界文学」で最初の小説と位置付けている。この「世界文学」という言葉は、明らかにデイヴィッド・ダムロッシュのそれとは意味が違うものであり、「西欧文学」と言い換えられるものである。『ドン・キホーテ』が享受している「傑作」

の地位は、西欧文学を暗黙の中心とする文学史観の上に形成された可能性を無視することはできない。よって、『ドン・キホーテ』と、アメリカ及び日本という非西欧の文学の関係を考察するという企て自体が権威的、帝国主義的な側面をもつ。また、伝統的な受容や影響という概念も、時代の古い作家が時代の新しい作家に影響を与えるという時間的ヒエラルキーを前提とし、常に、後発の作者は時代の古い作者たちの権威の下に置かれる。よって、時代の新しい作品は、あくまでも派生的作品、影響を「受けた」側の作品としてしか評価されない可能性がある。このように、『ドン・キホーテ』が、後世の作家やヨーロッパ以外の地域の作家たちに与えた影響を追っていくという作業は、結局のところ、『ドン・キホーテ』の権威を補強するだけに終始してしまうおそれがある。論者は、中心と周縁、オリジナルと模倣のあいだに優劣関係を適用すべきではないという立場を取っている。『ドン・キホーテ』が文学史の中心にあるのだとしたら、それは、他言語へ翻訳され、新しい文化的文脈で理解され、批評され、そして、作品内に取り入れられる、という「後発の」者たちの営為によって説明されるべきだと考える。『ドン・キホーテ』が、ダムロッシュ流の「世界文学」として「実りある」存在であり続けるのは、「発祥文化を越えた別の文学大系においてアクティヴに存在するとき」(ダムロッシュ) だからに他ならない。つまり、受け入れる側の積極的な働きかけのなかでのみ、文学テキストは生き続けることができるのである。本論文においても、テキストの流通と受容側の創造的役割を強調するという方針を取りながら、受容・影響研究における方法論の発展に寄与することを目指した。